



2016年の年頭にあたり

プラズマ・核融合学会長 小 森 彰 夫

新年あけましておめでとうございます。本年が皆様にとってよい年でありますようにお祈り申し上げます。

さて、国立大学等では、この4月から第三期中期計画が始まります。文部科学省は、大学に機能強化などを求めており、第三期中期計画の開始にあたって多くのハードルを設けました。例えば、概算要求は、当初、部局を超えた組織改革を伴ったものしか認めていませんでした。部局を超えた、即ち、異分野の研究者が協力して行う研究は、これまでにない新しい研究を生み出し、新分野の開拓、創成も望めることから、文部科学省もこれを奨励していると言えます。しかし、私の経験では、異分野間の研究は、分野にもよりますが、相手となる分野の事情などによって、簡単には実施できないようです。

プラズマ・核融合の分野は、ここ数十年の研究によって、基礎プラズマの体系化が進み、これを基に、現在、高温高密度プラズマ物理と核融合工学、半導体などの加工、プラズマ生物、基礎プラズマなどの研究が行われています。本学会の一般講演は、高温高密度プラズマ物理と核融合工学、基礎プラズマの一部が主で、他は他の学協会で発表されています。プラズマの研究が発展し、細分化、深化した結果、他学協会でもプラズマが関係した研究が展開されていることは、喜ばしいことかも知れませんが、プラズマ・核融合分野の将来を考えると、今が、本学会の今後の活動についての考え時ではないかと思います。他学協会でも活躍されている本学会員の指導層の先生方の多くは、本学会が設立される前には物理学会と核融合懇談会に所属していたため、核融合懇談会を基に設立された本学会員に、ほぼ自動的になられたと思います。しかし、この先生方の下、他学協会でも活躍されている若い世代の先生方は、本学会とは次第に馴染みがなくなり、世代が変わっていくと、プラズマを基にした研究にも関わらず本学会とは全く縁がなくなる可能性があります。

プラズマ・核融合学会は、プラズマと核融合の間に中点があり、プラズマに関連したあらゆる領域と核融合の領域が活躍できる学会として、先達が設立されたと伺っています。数年おきに他学協会に跨るプラズマコンファレンスを開催していますが、本学会の中で、プラズマ物理に基づく全ての研究を包含したプラズマ科学と、核融合に向けた核融合工学を総合的に推進すれば、プラズマ・核融合分野の新たな進展がより効果的に図られ、今後、何世代にもわたる発展が見込まれます。前述のように、異分野間の研究は、実施することが難しいかも知れませんが、研究内容が相当離れてしまったとは言え、プラズマの異領域間の研究は、プラズマ物理を共通基盤とする限り、容易に実行することができ、従来の研究の新たな展開、新しい研究・領域の開拓、創成が望めます。一致



団結して、基盤となるプラズマ物理も更に発展させ、後世に伝えようではありませんか。また、核融合の分野は、今後、益々多くの人材を必要としますが、この分野を目指す日本人の大学院生数は、年々減少しているように思えます。大学院生時代は異領域の研究をしていても、同じプラズマ・核融合学会に沢山の大学院生が属することは、核融合の人材の確保という観点で考えると重要なことと思われます。因みに、私も、今は核融合に属する一人のつもりですが、出身は基礎プラズマです。

これは、私の今年の初夢です。これから皆さんとご相談して、初夢が正夢になるように努力したいと思います。また、異分野との共同研究も諦めているわけではありません。今後、気合を入れて実現したいと思います。